平和の探求――内なる旅と外なる旅の宇宙的本性

アンソニー・J・マーセラ
前川健一　訳

※本稿は東日本大震災により中止となった講演会（本年3月17日、東京で開催予定）のために用意された原稿です。

献　辞

この発表は、以下の二人に捧げられる。彼らがいてくれたおかげで、平和に向けての私の旅は勇気づけられ、形づくられた。私の心を高みへと解き放ってくれた、友人であり同僚であり先生である、サミュエル・シャピロ教授。現実の中に多くの喜び（joys）があることを思い起こさせてくれた、友人であり伴侶であり妻である、ジョイ（Joy）・アン・マーセラ。

はじめに

それはおよそ善き時代でもあれば、およそ悪しき時代でもあった。知恵の時代であるとともに、愚痴の時代でもあった。信念の時代でもあれば、不信の時代でもあった。光明の時代でもあれば、暗黒の時でもあった。希望の春でもあれば、絶望の冬でもあった。前途はすべて洋々たる希望にあふれているようでもあれば、また前途はいっさい暗黒、虚無とも見えた。人々は真一文字に天国を指しているかのようでもあれば、また一路その逆

を歩んでいるかのようにも見えた。

チャールズ・ディケンズ（一八一二～一八七〇）『二都物語』（一八五九年）[1]

イギリスの作家チャールズ・ディケンズの、一世紀以上前の言葉は、我々の時代において再び生命を得ました。人間が生み出す驚異、人間の精神の可能性は、いたるところに見られます。しかし、そのただ中で、数多くの矛盾・葛藤・偽善に当惑していることに気づくのです。我々は解決を求めています。かつて生を支えていた神話が崩壊するのを目の当たりにして、我々は答えを求めて、天界と奈落とを捜索しています。我々が直面しているのは、大いなる不確実性であり、それを解決するために頼りにできるものは、我々の人間としての創造性以外には、ほとんど何もありません。ここに答えがあるのでしょうか。チェコスロヴァキアの詩人であり大統領をつとめたヴァーツラフ・ハヴェルは、かつて同じ問いを発しました。彼は言いました。

というのは、本当の問いは、「輝かしい未来」が本当にいつもはるか遠くにあるのか、ということだからである。反対に、既に長い間それがあったとしたら、どうだろう。我々の周りに、そして我々の内部にあるのに、それを見ることができず、発展させることができないのは、我々の弱さと洞察力の無さのためにすぎないとしたら、どうだろう。

これらの言葉には、非常に仏教的な何かがあります。それは、私たちの眼を次のようなことに向けさせます。自分たちの心を日常生活の束縛から解放すること、社会の圧迫から自らを解放すること、そして、私たちの内部にある真実を経験し、世界を一変させるためにそれを活用することにです。

平和の探求

はじめに、このような講演の機会を設けていただいたことに対し、SGI（創価学会インタナショナル）の池田大作先生ならびに関係者の皆様に、心よりの感謝を

申し述べたいと思います。私がお話ししたいのは、あらゆる人にとって関心があり緊急性のある問題であり、多種多様な仕方で私の人生の大部分を支配してきた問題、つまり、平和の探求ということです。

私の周辺には、一見したところ、充足や満足といった深い感覚が欠けていました。また、確かに、持続的な幸福や充実といった深い感覚も欠けていました。私はそうした欠如に当惑し、混乱していました。幼い子どもだった時、私はこのことに気づきました。単に生き延びることだけが必要でした。今日、私は同じことがあてはまると思っています。あまりにも多くの人が、物質的欲望の坩堝の真只中にとらえられ、そこから生まれる消費への欲求と、モノと資産の獲得のとりことなっています（物質主義には、この二つのことが欠かせません）。エンターテインメント、スポーツ、音楽、有名人の生活といったものには、浅薄で通俗的な気晴らしがたくさんあります。しかし、一皮めくれば、満足・目的・充実を求めての絶望的な探求があらわれます。人々は、それぞれの置かれた場所と経験の中で感じる欠乏と空虚の感覚から自分を解放しようとしています。しかし、自分たちにとって必要な、内なる平和と外なる平和という特別な状態が、自分たちの手をすり抜けていることに気づくだけなのです。

私はまた、自分の周囲の世界のため困惑してもいました。そこには、明白な問題がたくさんありました。それらは人間を苦しめるものであり、我々皆が経験したり目撃したりするものでした。すなわち、貧困、人種差別、暴力、抑圧といった問題です。こうした問題は、地球規模で現在も継続していますし、生き延びて良い目を見ようという当座の人間的要求によって、無視されたり否認されたりすることが、あまりにもしばしばです。

私は今晩、ジョージア州アトランタから皆様のもとに来ました。東京まで八二三八マイル（一万三二五八キロメートル）以上の旅路です。これは、初めての日本への旅ではありません。私は一九六七年に初めて日本に来ました。四十四年前になります。私はまだ若く、フルブライト奨学生として、フィリピンで貧富の格差と

生活上のストレスについて研究する途中で立ち寄ったのです。私は六十年代の特別な青年世代の一人でした。私たちは本気で、自分たちの志が高貴で道徳にかなっていれば、平和を手にすることができると信じていたのです。私が次に日本に来たのは一九九六年です。この時、私は池田大作SGI会長にお会いし、会話を交わすという、喜ばしい栄誉に浴しました。そして、鎌倉の大仏、龍安寺の庭園、金閣寺といった美しい名所旧跡の他、最初の日本旅行で私を大いに魅了した様々な場所を再び訪れました。こうした場所は、伝統的な日本の歴史と文化的価値を確言し立証していました。とりわけ、単純さ・美・調和に対して日本人が喜びを感じ、敬意を払っていることが示されていました。

最初に日本に来た時の経験は、長年にわたり、生命に対する日本人の独特の感覚を強く思い起こさせるものであり続けています。それは、内なる平和と外なる平和との基礎となる感覚です。実際、私はその時の興奮と驚異を今でも憶えています。私は、日本の各地を単に眼で見ただけではありません。直感的なレベルで経験したのです。それは私に、単純さ・美・調和・畏敬・精神性・平和が自然の秩序の中に一緒になって存在しているという真理を開示したのです。それらは一つのものです。単に我々の言葉だけが、そうした経験の一体性を分割しているのです。というのは、経験とは、生命力そのものに属する、さらに広大な意識と認識の諸側面だからです。

今、私が思うのは、我々の工業的・技術的な時代の気晴らしや酩酊作用が、伝統的な日本のこころに何をもたらしたのか、もしそうしたものがあるとしたら、それが何なのか、ということです。つまり、日本の国民性や心、人間観といったものの、独特な内なる精神と独自の外的表現に対し、グローバルな時代の生活が与えたかも知れないインパクトは何なのか、ということです。私が、ここで皆さんとお会いしているのは、単なる偶然ではありません。むしろ、遠い昔に蒔いた種が成長したということなのです。それは、目的論的な共同作業です。それによって、私たちは集まることができました。そして、平和ということの神秘を探究

するのです。その神秘は、我々の存在の内なる本質と外なる自然との間の関係を理解することの内に存しています。

私はこの場で、平和に対する人間の古びることのない関心について、思考を共有したいと熱望しています。この関心は、歴史を貫き、どの土地でも、どの民族においても、追求されてきたものです。釈尊、中国の老子や孔子、インドのマハトマ・ガンジー（ガーンディー）、日本の戸田城聖といった、過去の偉大なアジアの宗教的・哲学的指導者たちの、生涯と叡智と思想の中に、この関心は体現されてきました。ビルマ（ミャンマー）のアウン・サン・スーチー、ベトナムのティック・ナット・ハン、チベットのダライ・ラマ、日本の池田大作といった現在の指導者たちにも、この関心は体現されています。もちろん、こうした人々の声は、特定の文化の中で育まれたものではありますが、全世界にわたり時を超えて鳴り響く思想をもたらしています。

みなさまは、ブッダ（紀元前五六三～同四八三）が二五〇〇年前、「無益な語句を千たびかたるよりも、聞いて心の静まる有益な語句を一つ聞くほうがすぐれている」[2]と述べたことを思い起こされるでしょう。同様の叡智は老子（紀元前五七〇～四九〇）にも見ることができます。老子は、個々人の心の中の平和と、この世界における平和との間の、果てしのない連関に眼をとめ、次のように記しています。

もしこの世界に平和があるなら、
国に平和があるにちがいない。
もし国に平和があるなら、
都市に平和があるにちがいない。
もし都市に平和があるなら、
隣人たちに平和があるにちがいない。
もし隣人たちに平和があるなら、
家庭に平和があるにちがいない。
もし家庭に平和があるなら、
心に平和があるにちがいない。[3]

人間の条件を見つめる、こうした賢人たちの道に続

く者として、八世紀の菩薩シャーンティデーヴァがいます。彼は次のように述べています。

苦を免れようとねがって、（有情は反って）苦に突進する。薬を望んで、惑いのために、敵が為すように、自己の安楽を破る。(4)

同じ思想の流れに属し、似たような感性のもと、現在のダライ・ラマ（一九三五年七月六日～）は次のように述べています。

私の信ずるところでは、全ての苦しみは無知から生ずるのです。自らの幸福や満足をわがままに追い求めて、人々は他人に苦痛を与えます。しかし、真の幸福は平和と充足を感じることから生じます。一方、そうした平和と充足の感覚は、利他心・愛・共感の涵養と、無知・利己心・貪欲の除去によって、もたらされるに違いありません。

こうした平和の聖者たち、人類の教師たちの中の一人が、池田大作氏です。その疲れを知らぬ声は、半世紀以上にもわたって、平和を促進してきました。それは、仏教の中心教義についての執筆活動を通じてです。そこでは特に、平和に向けての内なる旅と外なる旅との間の関係についての仏教の基本的認識がテーマとなっています。池田大作氏の言葉には、相互作用・互酬性・苦悩の共有という、全ての生命を特徴づける大原則が映し出されています。彼は次のように述べています。

あえていえば、そこに「共生のエートス（道徳的気風）」ともいうべきものが、流れ通っているとはいえないでしょうか。（中略）対立よりも調和、分裂よりも結合、〝われ〟よりも〝われわれ〟を基調に、人間同士が、また人間と自然とが、共に生き、支え合いながら、共々に繁栄していこうという心的傾向であります。(5)

この講演では、この後、池田会長は、儒教の基本概念であり、儒教的な、社会関係や責務の規範にとって、重要な意味を持つ「大同」に言及しています。

あらゆる事物、なかんずく我々の存在の、内なる要素と外なる要素との相互性（たとえば生態系や共生）を通じて統一がもたらされ、さらに維持されるという考えは、もちろん、大乗仏教を特徴づける原理です。大乗仏教では、「覚り」は献身によって生じますが、それは自己への献身であると同時に他者への献身でもあるのです。大乗仏教の主張するところでは、自己と他者は不可分であり、我々の内なる本性と外なる自然とは不可分であることから、我々には他者に奉仕する特別の責任があります。これは、平和へ到る小道にとって、本質的な部分をなしています。

周知のように、この信念は「菩薩」の道です。彼は、他者が、彼ら自身の同情心・共感・個人的献身を通じて覚りを得ることを手助けしようとします。私は、偉大なる菩薩であるシャーンティデーヴァの言葉が好きです。彼の無限に続く詩は、全てのものを一体にする彼の内なる本性を、他者が映し顕すようにしようという彼の意欲を表現しています。

これら一切（宗教的行為）を行って、予の得たる浄善、――それによって、一切有情の一切苦を滅ぼしえたい。
予は病人の医薬であり、また医者でありたい。病気が再発しないまで（即ち全治するまで）その看護人でありたい。
餓と渇との災厄を、飲食の雨によって除きたい。
飢饉劫に於て、予は飲食となりたい。
貧しい有情のために、予は不滅の財宝となりたい。
いろいろの種類の用具を、彼等の前に供えて奉仕したい。
一切有情の利益を成就するために、この予は自己の存在（即ち身体）と、享受（の対象物）と、三世（に積み重ねた）あらゆる浄善とを、無貪著に捨離する。(6)

ロバート・サーマンは、チベット仏教を研究する仏

教学者で、現在はコロンビア大学で教えていますが、彼は次のように述べています。「これは、菩薩の救世主的な衝動であり、愛（慈）と同情（悲）の精神であり、覚りをもたらす心（菩提心）と呼ばれるものである。それは単に、全てのものが全てのものとともに安らかであれ、と願うことではない。それは、あなた自身が、他者に対する責任を引き受けるという決意なのだ」（Thurman, 1998, p.159）。もちろん、他者を助けることにおいて、菩薩は現実には彼自身ないし彼女自身を助けるのです。一体性という宇宙の法（時として神秘な法と呼ばれる）に対する目覚めが生じることを通じて、このことは起こります。この一体性という神秘な法が「妙法蓮華」と呼ばれるものです。

池田大作氏は次のように述べています。[7]「統合」という観念は、「結縁」という仏教用語の中に表現されているというのです（「結縁」は、字義通りには、「縁（関係）」を「結ぶ」ということですが、生命とその環境とを結びつける因果的な関係ないし作用を意味します）。「結縁」は、「縁起」の理論と結びついています。それは、ブッダと彼の弟子たちが推進した重要な信仰箇条です。縁起においては、社会現象であれ、自然現象であれ、あらゆる現象は、何か他のものとの結合の結果です。完全に他のものと無関係に存在するものはありません。全てのものは相互に関連し合っているのです。池田大作氏の指摘するところでは、相互連関という仏教の思想は、多くの次元を有するものであり、ある特定の瞬間にそうであるだけではなく、時間的・空間的に広がっているものです。

こうした素晴らしい言葉を前にし、また、こうした平和の偉人たちの思想を前にして、私は自らに与えられた任務を前に謙虚になると言わざるを得ません。平和がいかなるものか、皆様はすでにそれぞれにお考えをお持ちのことと思います。それは、この困難な時代のただ中で、皆様がじかに体験したことと、平和を追求する労苦とによって、鍛えあげられたものでしょう。短い時間ではありますが、なにがしかそれに付け加えることができればと願っています。何よりも、次のことを知っていただきたいのですが、私が今晩、ここに

来ましたのは、先人たちの思想を再確認し、声を大にして語るためです。彼らは、内なる平和と外なる平和の間の密接な連関に気づき、それを語りました。それは、全てのものの内在的な連関の間にあるものであり、意味や目的・充足を求める人間の探求と、宇宙創成の瞬間に起こった自己開示との間にあるものです。

平和の探求——内なる旅と外なる旅

お許し願いたいのですが、私はこれから皆さんが日常感じている安らぎを乱してみたいと思っています。というのは、平和を追求するにあたっての、一筋縄ではいかない居心地の悪さを一緒に考えてみたいのです。偉大な俳句の宗匠・松尾芭蕉（一六四四～九四）は「雲をりをり人を休める月見かな」と詠んでいます。生きていれば、心乱されることが必ずあります。そこに目をむけてみようというのが、この句の言わんとするところでしょう。ほんの少しの間ですが、私はここに表現されたような「雲」の役割を果たしたいのです。

・内なる平和

我々全ての課題は、生命の基本原則を把握することです。それは「埋めこまれていること（embeddedness）」[8]であり、全てのものを分離し結合する、「分裂」と「融合」という宇宙の恒常的な過程です。人間の脳というものは、我々の周りのものを区分し切り離して、指示と記憶の便のため、名前やシンボルをあてがうものですが、全てのものが互いに分離していて関わりがないというのは、一つの幻想です。物理的な意味での現実としては、全てのものは結びついており、一方から他方へと終わることなく流れ通っています。ここで、皆さんは「縁起」という日本語を思い浮かべられるでしょう。池田大作氏は、この言葉に対して、説得力のある理解を提示しています。

> 人間や自然の万象は、縁りて生起する相互関係性のなかで、互いの特質を尊重し、生かし合いながら存在していくべきことを促しているのが、仏

教の縁起観なのであります。／しかも、その関係性は、まぎれもなく、万物と連なりあう宇宙生命への直感に基づくものであります。／なればこそ仏法では、〝森羅万象のかけがえのない調和を絶対に壊してはならない〟として、一切の暴力を否定するのであります。(9)

私も、精神性豊かな生活を送るためのガイドラインを提唱したとき、似たようなことをコメントしました。その第一条は以下のようなものです。

私という存在と私の本性における精神性の次元に対して、今以上に意識的になり責任を持つことを、私は決意した。「私の内部にある、この生命の力は、宇宙そのものを動かし、支配する生命の力と同じものである」という自明の真理を受け入れ、自らのものとしよう。そして、それ故に、私は新しい畏敬の念とともに生命へと接近しなければならない。この真理の神秘性によって謙虚となり、しかも、それがもたらす帰結によって元気づけられ自信に満ちて、生命へと接近しなければならない。私は生きている！　私は生命の一部だ！　だからこそ、この事実に力を与え支持するような仕方で私は行動しなければならない。そして、それが要求し必要とするものに対し責任を持つような仕方で行動しなければならない。……私という存在の精神性の次元の完成を私は決意した。なぜなら、この追求の中でこそ、より大きな宇宙の計画において私だけに割り当てられた定めを発見し、それを果たすことができるからだ。大いなる計画の詳細は分からないが、しかし、それが意味するところは明らかだろう。それは全ての生命形態の進化しゆく調和・バランス・協働を促進することである。(Marsella, 1994, p.10; 1999)

私たちは、より大きな自然的・社会的世界の中に存在していますが、そこから自分たちを分離することを続けるなら、生命の発現として我々が有している全て

の可能性を我々が実現することはできないでしょう。多数の偉大な哲学者や宗教思想家が述べているように、我々は、自分たちを超える大いなる秩序との結びつきを認識しなければならず、その一部とならなければなりません。

我々全てが、今現在、人間がおかれている状況に気づいています。我々を取り囲む、心と人格に関わる諸問題は圧倒的であり、我々に苦悩と不快をもたらしています。我々は平和を求めています。調和し、生命の中心にいるという、あの素晴らしい感覚を、我々は欲しています。平和の核心にある、静穏な落ち着きを、我々は欲しています。我々の周りにある全てのものとの、そして宇宙そのものとの合一の感覚を、我々は欲しています。しかし、こうした全てのものが、私たちの手をすり抜けていきます。我々は、しばしば必死になって、平和を経験しようとします。しかし、恐怖・不安・不信・怒り・失望・絶望・不確実さ・疎外感といったものを経験するに過ぎないことが、あまりにも多いのです。「内なる」平和をもたらすと言われているものに、我々は向かいます。たとえば、内省や精神集中、祈り、瞑想、詠唱、ヨーガ、セラピーに、それに何らかの物質、つまり、精神安定剤やアルコール、非合法なドラッグにさえ、我々は向かいます。このまま世の中から退却を続けて、遠く離れた僧院に入ってしまおうか、そうすれば、この世の中とも縁を切ることができようと、考えたりもします。我々はしばしば宗教へと向かいます。自分たちの求めている平和が、信仰と修行の中に見出せるだろうと期待してです。

禁欲生活について議論する中で、チャムリーは次のことを指摘しています。禁欲したり隠遁したりして、精神集中を行う生活の中で、内なる平和を探究することには、大きな美徳がある、と。しかし、彼は同時に次のような注意も与えています。沈黙し、じっとしていることで静寂が訪れるが、そうした静寂を求める努力ほどには、隠遁は重要ではない、と。彼は次のように書いています。

悟りを得るためには、この世に背を向ける必要

があるのだろうか？　唯一なる神に対面するためには、厳格な禁欲生活が必要なのだろうか？　こんな風に言うこともできるかも知れない。私たちはみな、洞窟や僧院の代わりになるような現代の環境の中で、つまり、非人間的な高層建築と都市の街路という砂漠の洞穴の中にある近代的なマンションの部屋の中で、孤独な生活をすでに送っているのだ、と。この数十年にわたり、教会と「組織宗教」からの脱出が起こっている一方で、精神性を探究する人は記録的な数にのぼり、彼らは自己流に瞑想したり祈祷したりし、あるいは新しい教会で、あるいはヨーガの道場で、あるいは宗派に関係のない瞑想センターで、そうしている。沈黙し、じっとしているためだけに時間をとることには、大きな価値がある。一時的に自己を忘却し、自らに内在する唯一神との類似性を輝き出させることには、すさまじい力がある。一度に色々なことが進行する現代社会は、心をかき乱す刺激に満ちているが、そうしたものを鎮静化することは、平安をもたらすだけでなく、啓示的な体験でもあるかもしれない（古代の人々が待望し、「神体顕現（epiphanic）」[10]と呼んだもの）。（Chumley, 2011）

しかしながら、私の意見では、平和への内なる旅だけでは、それ自体として、常に不十分です。というのは、それは我々の関心を自己の内面へと釘づけにするからです。我々は一時的な安らぎを得るかもしれません。しかし、究極的には、不全感があるでしょう。というのは、内なる平和と外なる平和を追求し、両者を結びつけることにそなわる価値が、そこにはないからです。この結びつけこそ、ブッダの生涯を特徴づけるものではないでしょうか！「内なる」旅が重要でないというのではありません。むしろ、内なる旅の美点とは、それがあますところなく完成された場合、私たちが次のことに気づくという点にあります。すなわち、連関と一体性によって、自分たちを超えた世界に対する奉仕が要求されていることにです。

我々が生きている世界に存在する諸問題から逃げだ

すことは許されることではありません。むしろ、私たちは、不平等と不正を何とかしなければなりません。そこには、生き生きと感じられる情熱が必要ですが、それは我々が担う社会的責任や義務に出会うこと、つまりは外なる旅から生まれてくるものです。「内なる」旅の追求は、それ自体としては、「我々は分離している（すなわち、自己主張的である）と同時に、結びついている（すなわち、相互調整的である）」という生命そのものの原理を否定するのではないか、と私は感じます。内なる平和を追求する努力と外なる平和を追求する努力をみずからの意思によって融合しようとすることは、生命の、最も直接的で明白な発現なのです。

・外なる平和

皆さん、この中には、女性も男性も、若い方もお年を召した方も、お金持ちの方もそうでない方もいらっしゃると思いますが、我々は、我々という存在の本質そのものに挑戦してくる一つの世界に取り囲まれています。私は前に以下のように書いたことがあります。

> 人類の生き残りと安寧は、今や、複雑で相互に依存した地球規模の蜘蛛の巣の中に埋め込まれている。その蜘蛛の巣を構成するのは、経済的・政治的・社会的・技術的・環境上の諸事件や諸力・諸変化である。こうした諸事件・諸力・諸変化の規模・複雑性・諸帰結は、我々の個人としての安寧と集団としての安寧にとって重大な挑戦を行っている。そこには、一連の、複雑で、矛盾し、混乱した要求ないしは機会（あるいはその両方）がある。個人として、社会として、そして国家として、この挑戦に我々がどう応答するかが、来世紀における、我々の生活の性質や質・意味・安全といったものを形づくるのであろう。（Marsella, 1998, p.289）

我々のいるこの世界にとっての、政治的・文化的・経済的・道徳的な大変動の時代に、我々は同じ時間と場所を共有しています。我々の眼前には、様々な地域での、三十五を超える戦争、暴動、平和的革命があり

ます。それに加えて、特定の地域を襲う全面的貧困、広範な環境破壊、国境を超える移民の大波、致死的な病のおびただしい流行、政治的・経済的な難民の増加、そして、我々の資源と文化的な生活形態とは不釣り合いな地球規模での人口の増加といったものがあります。

我々は、通信情報技術に呑み込まれつつあります。それは、その力と大衆性そのものによって、人間の心を変形し、人間の本性そのものに対する我々の見方をも変形するよう迫っているのです。我々の生活は、ますます多国籍企業が構成する世界によって支配されています。彼らは、ビジネスと通商によってのみ我々の安全は確保されるのだと言いながら、恒常的な営業活動と宣伝を通じて、彼らが望むもの、つまりモノにしか価値を認めない消費者になるよう、我々を追いやっているのです。

我々は、安らぎと希望を、あらゆる社会的制度に求めます。政府、ビジネス、教育、宗教といった制度は、解答と保護を与えてくれるものだと、私たちは期待していました。しかし、結局分かったのは、そうしたもの自体が問題の一部であり、安全と保護に対する我々の要求に対立するものの一部だということでした。

我々の眼前には、グローバル化、地域分権、国家主義、そして地元密着志向があります。いずれもが、我々の忠誠心や是認・受忍・同一化を要求して競合しています。我々は、自分たちの生活を制御しようとします。しかし、たとえ我々が抵抗を試みても、以上述べたような様々な力は我々を堕落させます。それは古代ギリシアのホメーロスの叙事詩『オデュッセイア』に登場するセイレーン[11]のようなもので、我々は危険を認識して、何度も何度も心を逸らそうとします。我々は抵抗しようとします。しかし、我々を打ち負かすまで、それは何度も何度も戻ってくることを思い知るのです。

こうした環境のただ中で、我々は自分たちが当惑していることを見出します。私の青春時代と変わりません。私には不満が見えました。苦痛が見えましたし、怒りや不平も見えました。しかし、どうしてそれが続いていくのか、そうしたものを改善するためになされることが無いに等しいのは何故なのか、ということは、

理解できなかったのです。自分たちが送る生活そのものについて、不満について、自業自得の結果について、多くの場合、無自覚なまま、我々は、誰かから、何処かから、いつか、何らかの答えが出てくるのではないかと、探究し、希望し、思いめぐらすことを続け、それに耐えていたのでした。

一、アーサー・ケストラー――『機械の中の幽霊』

私はアイデアを必要としていました。私の思考を一つにまとめて結晶化するのに役立つような、束縛から解放する思想が必要でした。わたしはそれをアーサー・ケストラーの書物に見出しました。ケストラーは小説家として出発し、文明評論家になりましたが、彼が一九六七年に著した書物には、『機械の中の幽霊』という耳を疑うようなタイトルがついています。この書物の中で、彼は心理学の専門家ではない立場から、心理学の思考と理論の不毛さを論じています。なぜ不毛なのかと言えば、心理学が行動主義[12]やその他の機械論的な行動観にはまりこんだままだったからです。

ケストラーは「ホロン」[13]という概念を提示しました。彼によれば、全てのものは、たとえ個々別々に存在しているように見えても、それ自身を超える、より大きなものの一部なのです。彼は自分の考えを、ローマ神話に出てくる二つの顔を持つ神の名を借りて、「ヤヌス原理」と名づけました[14]。彼がこのことを示すために用いた見事な事例は、長年にわたって私の頭から離れませんでしたし、今この夕べにも私の思考を導き続けています。彼は次のように言っています。肝臓の細胞を一つ取って、ペトリ皿に置き、栄養を与えると、（細胞分裂をして）何世代にもわたって生き続ける。しかし、それは決して本来の性質を発揮することはない。他の肝臓細胞と結合させられないうちは、決して肝臓にはならないのである。他の肝臓細胞と結合された時はじめて、その本来の性質が完全に発揮される。言葉を換えて言えば、自己主張的で分離した生命の在り方を捨てた時にはじめて、部分の寄せ集めという以上の何か、つまり肝臓を作り出すことができる。それは、部分を単に加えていくということを超えた創発的な生命の形

態なのである、と。

ケストラーの洞察は、実際のところは、ルートヴィッヒ・フォン・ベルタランフィの初期のシステム理論に基づくものだったのですが、私にとってはきらめきを放っていました。そのアイデアは、次のことを明示していました。すなわち、細胞質から世界そのものにいたるまでの、全ての生命形態は、二つの面から成っている。一つは、「自己主張」の原理に支配される個別的要素、もう一つは、統合の原理に支配される創発的要素である、と。私の頭には、興奮が渦巻いていました！　ついに、人間行動に対する新しいモデルが現れたのです。それは、全てのものが相互に「埋めこまれていること」を、つまり生命の一体性を捉えていました。

今では、よりはっきりと、私には、我々の文化ならびに、我々の社会秩序と社会構成の性格が、しばしば、病理的で破壊的な効果をもたらすことが分かります。そうした諸力が、我々の人間性のおのずからなる満足と抵触したのです。我々は、個人性や個別性を評価するよう、しむけられていました。我々は、自らの生活を支える文化そのものによって邪魔され、統合を促進するよりも、それを減少させるような優先順位を選んでいたのです。平和の追求のために他者と結びつく機会を否定するような信念や価値・行動によって、生活形態が動かされていました。それが、諸問題の源泉だったのです。

二、平和に対する文化的・社会的障壁

これからお示しする十一の項目は、我々の存在の内的本質と外的本質を把握するのをさまたげ、エゴと自己陶酔の中に孤立したままにしている、大衆文化と社会に関わるテーマとして私が認めたものです。もちろん、これらは、外的な平和の探求にとっての最大の障害物のうちの幾つかにすぎません。何故なら、以下にあげるものの強調点が、より大きな社会秩序に対する感受性や意識・責任といったものを有していないに等しい目標と手段という点にあるからです。各テーマの末尾に、それぞれの正反対のもの、ないし別の方向へ

向けようと競合している力を、括弧に入れて記しておきました。

（一）消費主義。　個人としての満足とステイタスの源泉として、恒常的で際限なくモノを追い求めることを奨励すること。消費主義は、自然資源や人的資源の消耗や搾取にはほとんど関心がない。（持続可能性）

（二）物質主義。　個人の価値と安寧は、目に見えるモノや個人資産の獲得と、直接に関係しているという信念。物質主義は、消費主義の主たる源泉である。（精神性）

（三）商品化。　価値と有用性を決定する上で考慮できるよう、全てのものに貨幣価値を割り当て、商品（すなわち、商品市場や交易の場における商業や貿易の対象）として扱えるようにする。この心性の内部では、個人や政府の決定や商売上の決定にとって、金銭が決定的な決め手となっている。（人間の価値）

（四）暴力と物理的力。　快楽を得るため（たとえば、フットボールやコンピューターゲーム）と望みを達成するため（たとえば、脅迫、ギャング、戦争）の両方のため、残酷で攻撃的な力を使用する衝動・傾向。暴力に対して寛容であり、多くの点で、暴力的表現や、暴力がもたらすものに魅了されている。（平和）

（五）個人的な自己利益。　社会的紐帯に対してどのような帰結をもたらすかということに最低限の関心しか払わないほどに、個人に関心が集中していること。個人の権利を保護することは、人間としての消極的・積極的自由を保護する上で本質的なものではあるが、しばしば、より大きな社会的紐帯と衝突する。（共同体感覚（Gemeinschaftsgefühl））[15]

（六）有名人に一体感を持ち夢中になること。　自分自身の生活や、より広い世界の出来事に含まれる重要な問題への関心を犠牲にして、有名人の生活に起こる出来事に夢中になるほど、有名人の生活に熱をあげ、関心を持つ（たとえば、『ピープル』誌[16]

や、テレビのワイドショー、ファンクラブ、ソーシャルネットワークなど）。（「普通」の生活への愛着）

（七）競争。　競争は、アメリカの国民性と日常生活にとって、決定的な特徴である。教育・商売・娯楽・スポーツ・運動競技、さらに生活の中の政治的領域といったものにわたって、競争は良いもの、奨励されるべきものと考えられている。「適者生存」を美徳とすることは根深いものであり、二番手の人に対してはほとんど関心が持たれず、称賛されることもない。（協力）

（八）金銭的貪欲。　資本主義体制および、人生の全領域における競争への執着に対応して、抑制のない利潤追求は貪欲に転化してしまう。金銭と物質的な富を獲得しようとする過度の欲望であり、倫理的・道徳的規範を犠牲にし、しばしば法的規範をも犠牲にする。（共有）

（九）素早く恒常的な変化。　素早い「変化」と新しいものの追求を強調することが、高く評価される目標であり行動である。このことにエネルギーを供給しているのは、新しい技術である。変化の強調は、不断に、現在の習慣的な信念や行動の限界を破り、境界線を更新していく。このことは、露骨な性表現、暴力、服の流行などに関して、特にテレビ番組・映画・コンピューターゲームなどにあてはまる。（伝統、連続性）

（十）快楽主義。　快楽の追求は確かに、人間として「正常」な価値観であり行動であり、古代ギリシアで初めて詳細に解明され、続いて西洋の心理学で理論化された（「行動は、快楽を求め、苦痛を避けるように、動機づけられている」というように）。しかし、アメリカにおける快楽の追求は、自分を甘やかしたり、伝統や慣習を軽視することに広範な自由が認められているため、歯止めのきかないものになっている。こうしたものの見方は、快楽の追求を罪ととらえる宗教的信念と、しばしば衝突している。（自己否定、忍耐）

（十一）逸脱的なイデオロギー。　全世代にわたって、違法行為（たとえば、凶悪犯罪、拷問、強姦、小児性愛、

近親姦、ポルノグラフィ、薬物乱用、サディズム、マゾヒズム）を促進することで、人間の品位や道徳性を破壊することを、普通だと感じるような文化的イデオロギーが登場している。これは、文学・映画・音楽・テレビの中に現れている。（礼節、品位、敬意）

ここで、はなはだ気の滅入ることですが、私は次のことに注意を喚起したいと思います。これらは、アメリカの大衆文化の支配的なテーマであり、世界中の伝統文化を腐食し均一化する役目を果たしています。それは衝突をもたらすとともに、人々に、まやかしの目標と価値を受け入れたままの、実質のない生き方をするようにさせるのです。皆さんは、既に日本でこのことをご存じでしょう。しかし、私はこのことに心を留めてほしいと願い、この世界を現在形作ってる基本的な価値観や目標、選好といったものが何かを明らかにしてきたのです。私が絶対的に明らかにしたいと願うのは、こうした価値やテーマ・心性は、外なる平和にとって主要な障害であると私が考えていることです。

菩薩の道

私たちには、どのような可能性があるのでしょうか？　どのような道が？　どのような選択が？　遠く離れた僧院に隠遁することができるでしょうか？　そこでなら、禁欲生活を送って、真理の探究をすることができます。求める真理は、この世俗の生活の現実が否定され、忘れられた時に、手に入るでしょう。それとも、この現実世界からの挑戦の中に踏みとどまることができるでしょうか？　その場合、社会的責任や当為・礼節・義務といったものを引き受けることを、自らの意思で決断しなければなりません。菩薩になることはできるでしょうか？　もちろん、我々は菩薩になることができます。それは我々の本性なのです。しかし、菩薩になるためには、平和へと向かう二つの旅を結びつけることを可能にする「外なる」旅の中で、分離と離脱をうながす出来事や力に対抗しなければなりません。

次のように問うことは、もっともです。「何が私にで

きるのだろうか?」「どうすれば、こうした有害な出来事や力に対抗することができるのだろうか?」答えは、「沈黙よりも声を、受け身よりも行動を、我欲よりも苦悩の共有を」選ばなければならない、というものです。私たちの暮らしを取りまく文化は、平和と意味を求める皆様の探究とは、はなはだ異なる目標を持っています。その文化は、皆さんを単に「消費者」と見ています。それは、消費と購買を通じて攻撃的で貪欲なシステムを延命させるのに役立つ存在に過ぎないのです。また、その文化は皆さんを「国家主義者」と見ています。それは、自分の所属する国家の行動を喜んで受け入れる存在です。その行動が、正しくても間違っていても、自分勝手な利益のために、他国を侵略したり、占領したり、支配するものであってもです。

皆さんのお答えは、明快で疑問の余地のないものでなければなりません。大衆文化の要求に抗するためには、できる時に、できることをしなければなりません。最終的に、私たちは、共感や、苦悩の共有、「共同体感覚」を促進することを通じて、正義・寛容・平等・持続可能性を推し進めることに貢献することが望ましいと言えます。現在の時点で私が見るところでは、以下のことをすることで、世界に関わることができます。

（一）宇宙は一体であるという仏教哲学を受け入れる。
（二）「分裂」と「融合」という宇宙の原理を受け入れる。
（三）暴力・紛争・戦争よりも平和を選択する。
（四）受け身よりも積極的行動を選択する（投書、義援金、投票）。
（五）沈黙よりも声をあげることを選択する（非暴力抵抗）。
（六）我欲よりも奉仕を選択する（ボランティア活動）。
（七）競争よりも協力を選択する。
（八）無知よりも教育と学習を選択する。
（九）恐怖と慰藉よりも勇気を選択する。
（十）不正よりも正義を選択する。
（十一）私生活・職業生活・市民生活を結びつける。
（十二）殺さないことを支持する。「殺されない権利を

明言するとともに、他者を殺さない責任を担う」（Paige, 2002, 2009　参照）。

（十三）世界人権宣言を支持する。

（十四）「暴力のない世界に対する憲章」[17]を支持する（Nobel Prize Laureates Charter, 2007）。

（十五）生を選ぶ、すなわち生命主義を選択する。

生命主義

今晩、私は皆様と、我々が人生で行う内なる旅と外なる旅を通じて平和の探求を行うことについて、幾つかの考えを共有することができました。しかし、とりわけ私が言いたかったのは、内なる旅と外なる旅の間にある区別は、幻想であるということです。その理由は、宇宙創造の最初の瞬間の本質そのものにあります。そこでは、物質とエネルギーが空間の中を広がり、宇宙を形作り、「分裂」と「融合」を通じて一体性をもたらしたのです。これが我々のいる宇宙の本質です。そこでは、何十億もの星が我々の銀河系を形作り、莫大な数の銀河系が我々の宇宙の中にあります。ここで私が指摘しなければならないことは、現在の宇宙物理学の想定では、我々の宇宙を超えて多くの宇宙があるということです。このことは、私たちを驚異や畏敬・啓示で満たすことでしょう。それは、生命を肯定するものです。まさにこの宇宙創造の運動に即応して、内なる旅と外なる旅の間にある差異は消え去るのです。この二つの旅は一つであり、生命によって賦活されているのです。（Marsella, 2007, 2008）

我々は「生命」の一部です。この「生命」とは、宇宙を動かす力そのものであり、「生きている」と我々が呼ぶ全てのものの中に存在するものです。我々は生きています。つまり、我々は「生命」の一部です！　この前提を受け入れ、これを個人ならびに集団としての我々のアイデンティティの核心とすることによって、我々は明瞭に、そして決定的に、安寧な生活に対する我々の感覚に向かって、真理を主張することができるでしょう。その結果、その真理は、我々の個人としてのアイデンティティや集合的・国民的なアイデンティティにとって、碇の役目を果たすものとなるでしょう。

我々は、個人や文化・国家のレベルでのアイデンティティをめぐる闘争を超えて、究極的なアイデンティティを目指すことができます。それは、「生命」であり、それを養い維持する生態系です。私たちは、新しい哲学、新しい信念と実践の組み合わせを探究することができます。それは、人類を、生命そのものの投影の一つに過ぎないと考えるのです。私はこれを「生命主義」と呼びます。

この「生命主義」の精髄を体現した多くの言葉が、世界中にあります。たとえば、南アフリカには「ウブントゥー」という言葉があります。その意味は、「最高の同情心と、怒り・恨み・妬みの拒絶を体現した、思いやり」です。「ウブントゥー」は、自責と謝罪という観念を許しと結びつけるものであり、「真実と和解」運動[18]の核心にあるものです。サンスクリットには、「アヒンサー（不殺生）」という言葉があります。その意味は、「暴力（ヒンサー）がなく、そのことによって、恐れも憎しみもなく、不正に抵抗できるということを含意した、人間らしさ」です。また、ハワイ語には、「アロハ」という言葉があります。翻訳しづらい言葉ですが、その本質的な意味は愛であり、精神的な関係を持とうとすることです。最後に、もちろんですが、「サティヤグラハ[19]」という言葉があります。これが意味するものは、「存在と実践における非暴力」です。これは、「非暴力」というガンジーの使命の中心にあるものであり、近年では、グレン・ペイジ教授の「殺すな」運動の中心にあるものです。さらに、日本語の「縁起」も忘れてはいけません。これは、全てのものの間の一体性と連関を意味しています。これらに加えて、「アガペー」というギリシア語を挙げたいと思います。これは「人間に対する無条件の利他的な愛」を意味します。これは、キリスト教の中心にあると考えられているものです。それが忘れ去られていないとすればですが。(Marsella, 2006)

「生命主義」は、最高度の意味での畏敬・啓示・連関です。ここにおいて、我々は自己自身を超え、時間・空間を超えて、新しいレベルの意識へと動かされます。精神性が、我々個々ならびに我々という集団を動かし、

我々の過去を超え、今この一瞬の豊かさへと運びます。そして、これとともに、我々個人ならびに我々という集合の経験のレベルよりも大きな何かへの愛着と帰属の経験が出現するのです。我々は「生命」の一部であり、そのことが意味するのは、我々が、地球上のあらゆる形態の「生命」に結びついており、宇宙そのものの神秘に結びついている、ということです。

「生命主義」は、我々に、死に直面し、死を省察するように、そして、死が生命と不可分の関係を持っていることを理解するように、勇気を与えてくれます。我々が全ての生命形態の中に「生命」を見るにつれ、我々は「生命」と「死」の不可避の循環を、とりわけ、この二つのものが一つであるという事実を、鋭く意識するようになるのです。「生命」と「死」が一つであるという神秘を理解し受容することだけが、我々の生を豊かにし、「生命」を増進するという大きな責任感を増進することができるのです。これは、我々の時代にとっての新しい信念体系です。これは、我々が、個人として、社会として、国家として直面している試練のただ中で生きていくための精神的基盤です。それは、我々に次のことを要求します。我々という存在の実質は、星々を生み出す物質にほかならないことを把握し受容しなければなりません。また、我々の創造に内在する生命の法則にしたがって生きなければなりません。さあ、私・私たち・生命と宇宙とは一つであるという真実を胸に抱こうではありませんか。

訳注

訳注にあたっては、ウィキペディアを参照しました。

（1）中野好夫訳『二都物語（上）』（新潮社・新潮文庫、一九六七年）九頁。

（2）ダンマパダ第一〇〇詩、中村元訳『ブッダの　真理のことば・感興のことば』（岩波書店・岩波文庫、一九七八年）二四頁。

（3）老子の言葉として、英語圏では流通しているようであるが、少なくとも『老子（道徳経）』には直接的に該当する文はない。正確な出典は不明。

（4）入菩提行論一・二八、金倉圓照訳『悟りへの道』（平楽寺書店、一九六五年）九頁。

（5）「21世紀と東アジア文明」、『21世紀文明と大乗仏教』（聖教新聞社、一九九六年）二六〇頁。

(6) 入菩提行論三・七～一〇、金倉圓照訳『悟りへの道』二八～二九頁に基づき一部改変。

(7) 「東西における芸術と精神性」、『21世紀文明と大乗仏教』一三四頁。

(8) 後述の「共同体感覚」と同じく、アドラーに由来する概念で、アドラー心理学では、個人は社会に埋め込まれた（統合された）社会的存在ととらえる。ここでは、それを拡張して、あらゆるものが全体としての宇宙に埋め込まれていると把握している。

(9) 「平和と人間のための安全保障」、『21世紀文明と大乗仏教』七二～七三頁。

(10) エピファニー（Epiphany）は、人の子として生まれたイエスが、神性を顕したこと。宗教学者のエリアーデは、これを一般化して、聖なるものの顕現を「エピファニー」と呼んだ。ここでは、エリアーデ的な意味合いで用いている。

(11) セイレーンは、半人半鳥（下半身が鳥）の怪物で、その美しい歌声に惹かれた船人は難破してしまうとされる。

(12) 心理学の対象を、客観的に観察できる行動に限定し、心という実体があることを認めない立場。

(13) 「全体子」と訳されることもある。ギリシア語で「全体」を意味する「ホロス」に、部分を意味する接尾辞「オン」を結合した、ケストラーの造語。後述の「ヤヌス原理」に示されるように、下位のものにとっては全体でありながら、上位のものにとっては部分であるような存在の在り方を言う言葉。

(14) ヤーヌスは、一月の守護神で、頭の前だけではなく、後ろにも顔がある。「ヤヌス原理」とは、どのようなものも、それ自体より大きなものにとっての部分であるとともに、それ自体よりも小さなものにとってはそれを包括する全体である、ということ。このような両面性を、二つの顔を持つヤーヌスに喩えた。ラテン語としての正しい表記は「ヤーヌス」だが、一般には「ヤヌス原理」と呼ばれる。

(15) 「共同体感覚」は、精神科医・心理学者であるアドラーの用語で、個人がより大きな共同体の一部であり、共同体や他者の利益のために行動しなければならないと思う感覚のこと。

(16) 一九七四年創刊のアメリカの有名な娯楽雑誌。

(17) ノーベル平和賞受賞者世界サミットが、二〇〇七年に発表したもので、平和社会の構築を訴える十二のアピールから成る。

(18) 独裁や人種差別などで深刻な人権侵害があった国・地域で、過去の過ちを直視し、和解を進める運動のこと。南アフリカでの「真実和解委員会」の活動などが有名。

(19) 直訳すると「真理の把持」。ガンジーが、自らの思想と行動の核心にあるものとして述べた言葉。

参照文献

Bertalanffy, L. (1968). *General System Theory: Foundations, Development, Applications*. NY: Braziller （邦訳　長野敬・太田邦昌訳『一般システム理論』、みすず書房、一九七三年）

Chumley, N. (2011). The Value of Asceticisim. http://www.huffingtonpost.com/norris-j-chumley-phd/the-value-of-asceticism-t_b_806700.html Posted : January 17, 2011 08:32 PM

Henderson, H. (1958). *An Introduction to Haiku: An Anthology of Poems and Poets from Basho to Shiki*. NY: Doubleday/Anchor.

Ikeda, D. (2004). *Fighting for Peace: Poems by Daisaku Ikeda*. Berkeley, CA: Creative Arts Book Company.

Ikeda, D. (2010). *A New Humanism: The University Addresses of Daisaku Ikeda*. NY: I.B. Tauris

Koestler, A., (1967). *The Ghost in the Machine*. NY : MacMillan（邦訳　日高敏隆・長野敬訳『機械の中の幽霊』、筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉、一九九五年）

Marsella, A.J. (1994). Making Important New Year Resolutions. *Honolulu Star Bulletin,* December 30, p. 10.

Marsella, A.J. (1998). Toward a Global Psychology: Meeting the Needs of a Changing World. *American Psychologist, 53,* 1282-1291.

Marsella, A.J. (1999). In Search of Meaning: Some Thoughts on Belief, Doubt, and Wellbeing. *The International Journal of Transpersonal Studies, 18,* 41-52.

Marsella, A.J. (2006). Justice in a Global Age: Becoming Counselors to the World. *Counselling Psychology Quarterly, 19* (2): 121–132.

Marsella, A.J. (2007). *Identity: In Search of Meaning and Purpose in a Global Era*. Keynote Address: The Forum for Advanced Studies in Arts, Languages, and Theology (SALT) Uppsala University, Uppsala, Sweden (April, 2007)

Marsella, A.J. (2008). Identity: Beyond Self, Culture, Nation, and Humanity to "LIFEISM." *PsySR Herald (Psychologists for Social Responsibility Newsletter)*. May 1, 2008. Volume 1, #2.

Nobel Peace Laureates. (2007). *Charter for a World Without Violence* (www.nobelforpeace-summits.org)

Paige, G. (2002). *Nonkilling Global Political Science*. NY:Xlibris (Also www.nonkilling.org)

Paige,G. (2009). *Nonkilling Global Political Science*. Raleigh, NC: Lulu.com (Also www.nonkilling.org)

Thurman, R. (1998). *Inner Revolution: Life, Liberty, and the Pursuit of Real Happiness*. NY: Riverhead Books, pp. 158-159.

（Anthony J. Marsella ／ハワイ大学名誉教授）

（訳・まえがわ　けんいち／東洋哲学研究所研究員）